

## 第二外国語を学ぶ

### － リスペクトとオープン・マインド －

#### 武蔵の第二外国語

43年ぶりに武蔵に戻って驚いたことの一つは、第二外国語（以後「二外」）が中学生で必修になっていたことと、その言語も以前のようなドイツ語だけでなく、アジアの言語も含め多言語化していたことだ。

このような学校は他にあるだろうか。現在、グローバル化の文脈の中で、様々な人から、世界共通語の英語だけでなく、外国語習得の必要性が叫ばれている。頭の柔らかな中学生の時期に、全員に二外を学ばせようという武蔵の先見性に感心した。

#### 世界の言語

世界には現在196の国がある。それでは世界の言語の数はいくつか。言語の数も国の数と同じだと思ったら大間違いである。

2015年版の Ethnologue によると、その数は7097言語とのこと。もっとも、多くの言語が1000人以下の話者しかいないということだ。一方で、話者の多い言語は何だろう。

色々な統計の取り方があるが、母語話者＋第二言語者＋言語習得者の数字で見よう。（カッコ内は母語話者の数）

英語	15億人（3億7500万人）
中国語	11億人（9億8200万人）
ヒンドゥー語	6億5千万人（4億5千万人）
スペイン語	4億2千万人（3億3千万人）
フランス語	3億7千万人（7900万人）

アラビア語	3億人（2億600万人）
ロシア語	2億7500万人（1億6500万人）
ポルトガル語	2億3500万人（2億1600万人）
ベンガル語	2億3300万人（2億1500万人）
ドイツ語	1億8500万人（1億500万人）
日本語	1億2800万人（1億2700万人）
韓国語	7800万人（7800万人）

※出典；世界で最も使用される言語ランキング <https://e-student-ph.com/worldwide-languages-ranking-1780.html#i-3>

「母語」だけの人口で見れば中国語が第一位になるが、世界共通語の英語を話す人は、言語習得者も含め、15億人ということである。しかし、たかだか15億人。世界の総人口が70億人とすると、英語でつながることができる人は約20%にしか過ぎない。（逆に、20%の人にもつながるといふべきか？）

そうした中で、武蔵はドイツ語、フランス語、中国語、韓国朝鮮語を二外としている。話者人口だけで見ると、中南米で使用されているスペイン語や南アジア・西アジアで使用されているヒンドゥ語・ベンガル語やアラビア語の方が多い。

しかしながら、学問・文化・芸術等への影響力や東アジアに位置するという地理的な状況を考えると、この4つの言語は、学ぶべき二つ目の外国語としては、適切な選択のように思う。

### なぜ二外を学ぶのか

それでは、なぜ二外を学ぶのか？

昨年度の国外研修生報告会で、ある生徒がこんな話をしたと聞いた。「二外を学ぶのは、その国への敬意を示すこと」だと。私は

強く共感した。

よく日本にやってきた外国人のスポーツ選手や監督がインタビューを受ける。でも日本語の使用頻度はさまざまである。外国人が学ぶ上で日本語の構造は難しい。いつまでたっても日本語を全く話さない人もいる。片言ながらも一生懸命話す人がいる。

皆さんはどんな印象を持つだろうか。一生懸命日本語を使おうとする人に親しみを感じないだろうか。それは、その人が日本語をそして日本文化に「敬意」を表していることを肌で感じるからではないだろうか。

逆も同じである。日本人が、異国の地で、その地域の言葉を、たどたどしくも使うことで、相手とのコミュニケーションは確実に変わっていく。

私は、「よいコミュニケーション」には二つの要素があると思う。一つは「リスペクト」。もう一つは「オープン・マインド」である。ちょっと苦手だなと感じた相手であっても、相手に「敬意」を払い、心を開いて何でも話し合う、あるいは異論をも受け入れる。それは人としての度量の広さである。

それは個人間でも国家間でも同じである。今、世界情勢は確かに厳しくなっている。自国至上主義を掲げている国も少なくない。相手の国や相手の文化をリスペクトしない風潮が広がることは、決して好ましいことではない。

二外を学ぶ武蔵生には、ぜひ他者や他文化に対する「リスペクト」と「オープン・マインド」の感覚を身に付けてほしい。二外を学んで国外に研修にいき、身をもってそのことを体感し、「敬意」という言葉で表した武蔵生に、私は感銘を覚えた。

### 中3は初級にどう取り組むか ー二外の課題ー

二外の授業は、忙しい中、ネイティブの先生も含め、武蔵生のために教えにきてくださる多くの非常勤の先生方の力をお借りしている。私は武蔵に着任したときに、その先生方に教えている感想をお聞きした。多くの先生方は、武蔵生の好奇心に感心されている一方で、意欲のある生徒と意欲のない生徒に分かれてしまうという課題に頭を抱えられていた。

確かに、一定程度言語を習得するには、ある種の反復や努力が必要だ。その反復や努力を怠ると、語学はつまらなくなるかもしれない。まして「受験には関係ない」とか、「僕は国外に行くつもりはない」という言い訳が強くなってくると、勉強にも身が入らないかもしれない。

でも、騙されたと思って、一年間頑張ってもらいたい。「本気」で二外を習得する気持ちをもってほしい。そして二外の言葉やリズムを楽しんでほしい。そこで学んだことが、武蔵の国外研修制度を経由して旅立っていった先輩たちのように、将来直接的に大きく役立つ場合もあるだろうし、そうでなくとも思わぬところで何かしらの機会に役立つことがあるのではないかな。

私は武蔵では二外を学ばなかったが、大学では二外として、中国語を選択した。決してできのいい生徒ではなかったけれど、それでも去年40年ぶりに中国を訪問した時に、代表してあいさつする機会があり、つたない中国語でお話ししたら、とても喜んでもらった。心がちょっと温かくなった気がした。

世界は「リスペクト」と「オープン・マインド」を求めている。ぜひ、武蔵生にはそんなことを自然にできる人間になってほしい。さあ、騙されたと思って、二外に積極的に取り組んでみよう！！